

いまどきの若者たちの 自己・対人認知に関する覚書

渡 邊 席 子

1. 問題提起

「学力低下」、「コミュニケーション能力不全」、「考える力の欠如」等々、近年の若者たちはこれらの言葉と共にその至らなさを指摘され、辛辣に批判されているようである。年齢がある程度以上に達している人々は、社会の中でさまざまな経験を積み、若者だった頃に比べれば格段に成長している。このような人々から見れば、成長途上の若者たちの至らなさが目につくのはむしろ当然のことであるといえよう。

ただし、「いまどきの若者はなっていない」と発展途上の若者を蔑み批判するだけというのなら、それにどれだけの意味があるというのか。とりわけ教育を提供する側の人間は、ただ批判するだけのレベルにとどまるべきではない。至らない点があるのなら、その時点で恨まれるか感謝されるか如何にかかわらずそれを若者たち自身に自覚させ、自ら改善の糸口を掴むよう導くために、我々「大人」にもまた試行錯誤を繰り返しつつ彼らと向き合い、真正面からぶつかってゆくことが求められるはずである。にもかかわらず、どうすれば改善するのか対策も実働もなしに批判するだけな

ら、それは子供の喧嘩と同レベル、全くもって非建設的な難癖に他ならない。

では、我々大人は何を為すべきであり、何を為さないべきなのか。策に関して唯一無二の答えがないからといって放置しておくのは無責任であるし、かといって下手に口を出しすぎればただの使い古された説教になってしまう。建設的かつ効果的な大人の意見は、今の時代どうあって然るべきなのだろうか。我々教員と名のつく職にある者にとっては、避けて通ることのできない非常に頭の痛い問題である。

本研究は、難癖をつけるだけの不毛な議論を脱するために、現時点で一体何が起きているのか、その現状を描写することを第一目的として行われた探索的予備調査の結果報告である。まずは近年の研究を振り返り、若者像についていかなる報告がなされているのかに触れたあと、筆者による予備調査のデザイン及びその結果・考察について述べ、最後に我々が何を考えてゆかねばならないのか、展望について述べたい。なお、本論文が実証研究ではなくあえて「探索的調査の覚書」と銘打たれているのは、これが仮説検証型の実証系研究ではなく、筆者の個人的経験事象に基づき、その背景を探る試みの一環、いうなれば今後の研究へのファーストステップだからである。

1. 1 最近の研究より

あちこちで当たり前のように「学力低下」と「教育改革」の二語を見かけるようになった。実際、学校と名のつく場所は変化を要請され、いわゆる「ゆとり教育」、「生きる力をつける教育」のための試みが手探り状態ながら多々行われるようになってきた。こうして義務教育、高校教育が変われば当然、大学も変革を要求されるようになる。しかも変革への動きは、何も外部からの圧力でのみ起こるわけではない。多くの大学で改革が叫ばれるようになった背景には、これまでのようなカリキュラム、授業形態で

は学生を育てることも、学生に意欲をもってもらうことも十分にできなくなってきたという嘆かわしい現状の存在がある。

このような流れを受け、心理学や社会心理学の分野においても、学生の質の変化や、学生の態度・行動についての研究が頻繁に見られるようになった。「数年前と何かが違うように感じる」との意見は、おそらく現場の多くの教員が抱いている共通の見解であろう。しかしあくまでも共通の経験的見解の粋を出ず、実際のところは何がどのように違っていて、何故違っているのか、そもそも本当に違っているのか、答えを得るところまではなかなか行き着かないのが現実である。とはいえ、現状をできるだけ客観的に捉えようとする試みを足がかりにして教育の突破口を見つけてゆかなければ、教育を提供する側の我々は、何を為すべきかも解らない完全な袋小路に自らを追い込むことになってしまう。そこでまずは、「いまどきの若者像」を示そうと試みた学術的研究をいくつか眺めてみることにしよう。

田中(2002)は、大学生400人を対象に行った調査研究報告の中で、「私はすべての点で自分に満足している」との項目に対する調査対象者たちの回答パターンを紹介している。この項目に対する有効回答395のうち、あてはまると答えた学生とあてはまらないと答えた学生の比は59：336であり、現在の自分にはどちらかといえば満足していないと思っている学生が圧倒的に多いことが示されている。もちろん、今の自分に手放しで満足していると答えることのできる人間がそれほど多くないことは、直感的にも容易に理解できる。ただし田中(2002)は、あてはまらないと回答した336名がその理由として、「現状に満足してしまったら、今後の成長が望めないから(139名が回答)」という意欲的な回答の他に、「今の自分が嫌いだから・自分に自信がないから(108名が回答)」、「自分のやりたいことが見つからないから、充実していないから(89名が回答)」とも回答していたことをあわせて報告している。つまり、満足していないと答えた学生たちの中には、まだまだこれからだから満足していないという前向きな態度をもつ者と、

自分に対する否定的な感情が先に立つ者たちが混在しているといえる。

このような否定的感情は、いわゆるモラトリアムと呼ばれる時期にさしかかった若者が必ずといっていいほど一度は経験するものである。「自分探し」をするこの時期に光明を掴む者もいれば、何をしてもいいのかもわからず、ただ日々を何となく過ごし、充実していない、つまらないと嘆く者もまた出てくる。大学に入るまでは一生懸命勉強していたが、いざ自由を手に入れたとたんそれまでの意欲を失い、何をやってもつまらないと思ってしまう学生は、副次的に学業への意欲も減退させてしまうと思われる。では教員の側が大学で面白い授業を提供すればいいのかといえば、それほど簡単な問題ではないと筆者は考える。どんなに教員が良質な授業を提供していても、学生の側に学ぶ意欲がなければ面白いと思うところまで到達しないし、面白いと思わなければ意欲とてわからない。つまり、意欲と授業の質の関係は「鶏が先か卵が先か」の議論のようなものであり、どちらか一方を原因、もう一方を結果とみなすことはナンセンスである。意欲も授業の質も同時に高めることが、「つまらないからやる気がない学生、学生のやる気のなさに絶望する教員」の間にある困った均衡状態を脱する突破口となりうるであろうことは、まず間違いない。ところが、言うは易し、行うは難しである。お金を払ってまで教育というサービスを受けていたはずの学生は、つまらないと思った授業に学ぶ意欲を失い、意欲がないからますます面白いとは思えず、授業そのものにも出てこない。挙句、結局何のために大学まで進んだのかがわからない、との悪循環にはまりこむことにもなりかねない。

では、授業を全く放り出してもよいのかといえば、そうもいかない。全く授業に出ずに勉強もしなければ、単位を失う可能性が増大するからである。そこで学生たちはひとつの解決策として友達のを借りようとする。交代で授業に出る、あるいは個々に担当科目を決めて責任をもってノートをつくり、あとから交換する、まじめに出ている友人を複数確保してノー

トを借りる等して、全教科のノートを集め、試験に臨み、単位を獲得する。要領がよければ、自力でゼロから勉強せずとも大学卒業の資格を得られる事態が現実存在していることは否めない(島田, 2001)。ところがこのような要領重視の方法は、代返が難しく、かつ出席を重視する授業ではなかなか機能しない。面白いとは思っていないが、出席だけは稼がねばならないので授業に参加する学生の間では必然的に、退屈な授業時間を消化するための何らかの別行動が生じてくる。その中のひとつが、近年非常に問題視されている「私語」であろう。大学生「にもなって」私語をする者がいるという事態は、若き頃から上昇志向をもって物事に挑み、今の社会をつくりあげてきた叩き上げの世代にとっては全くもってありうるべからざることであろう。だが学生の側からしてみれば、私語もまた立派な友人同士のコミュニケーションなのである。近年は、つまらないのに何故大学に出てくるのかと問えば、友達がいるからと堂々と答える学生もいるのだという。もちろん、本来の目的どおり、学ぶために大学に来ている学生とてたくさんいるであろうし、そのような学生の学習意欲を阻害する要因にもなりかねない私語をできるだけ防ぎたいと思うのは、教員の側としては当然のことである。ところがここ数年で、私語の形態そのものが大きく変化してきているのだという。それこそが、モバイル世代の代名詞ともいえる「メール私語」である。

1987年、本格的な携帯電話サービスが開始されてから10年の間に端末はどんどん軽量化し、サービス内容も拡大していった。1997年頃からは、それまでパーソナルコンピュータユーザが主に用いていた電子メールすら携帯電話で発信受信が可能になり、1999年に登場したNTTドコモのi-modeサービスによってその利便性が一気に上昇した(岡田・松田, 2002)。各社の競争状態は料金の低下を増進し、その結果として若者の多くが携帯電話を所持し、いつでもどこでも他者とつながることのできるホットなコミュニケーションツールとして当たり前のように用いるようになった。メール

私語も、そうした流れの中でごく自然に生まれてきた新しい授業中の暇つぶし方法であるといえる。

メールによる私語が、これまでに私語として教員の間で共通認識をもたれてきたものと何が違うかといえば、①(音をほとんど発しないという意味で)人に迷惑をかけない、②自分の好きなときにできる、③居ながらにして異空間にアクセスできる、等が挙げられる(島田, 2002)。つまり、他者に音による迷惑をかけないという意味で周囲への被害が著しく小さく、マナーという意味では望ましくないことであるという認識も薄れやすくなるといえよう。

このように、手軽に使えるようになったメールであるが、便利さと同時にやっかいな問題をも我々に投げかけている。例えば岡田・松田(2002)は、携帯電話は人間関係をつなぐメディアであり、その有効性は疑いようもないが、同時に大きな矛盾を抱えていることを指摘している。携帯電話を持てば、いつでもどこでも他者と交流できる。家に備え付けの電話の前で、来るかどうか分からない電話を待つ必要はない。だがそれは言い換えれば、いつでもどこでも他者と交流できるはずなのに連絡が来ない、という孤独をも生み出す。よく言われる「携帯依存症」は、まさにこういった状態を示すものである。また、世間に流布している俗説の中にも、携帯電話でのコミュニケーションが増加すると直接対面コミュニケーションが減少し、人は他者と直に交流をもたなくなるというものがある。もしもそうだとすれば、組織・社会の維持存続が危ぶまれる致命的な状況が生じる可能性がある結論付けざるを得ない。だが、本当にそれほど致命的な状況が生じているのだろうか。

都築・木村(2002)は、大学生372名を対象に、対人意識(対人恐怖・依存欲求など)が携帯電話・携帯メール・電子メールの使用頻度とどのような関係にあるのかを調べるための調査研究を行った。彼らの報告によれば、携帯電話の使用頻度には、通常の直接的対人関係時に作用すると考えられ

る対人意識が影響を及ぼしており、直接的関係とほとんど相違はないのだという。一方携帯メールは、親和感情と情報収集にかかわるコミュニケーションに用いられている可能性が示唆されている。この調査では、携帯電話や携帯メールを使用している学生が全調査対象者の9割以上に及び、もはや人間関係内でのコミュニケーションツールとしてこれらのものの存在を無視することができない事態が示唆されているといえるだろう。つまり、我々が若者と呼ばれていた時代とはコミュニケーションの手段が変化、あるいは選択肢が増加しており、これまでどおりの考え方で若者たちの理解をしようにも、古い見方故の誤解や、理解の範疇を超えた事象が起きていることを常に考慮しておかなければならないのである。

さらに五十嵐・吉田(2002)は、携帯電話を用いた通話・メールコミュニケーションは直接的コミュニケーションと同等程度に我々の日常に入り込み、対人関係の形成とも深く関わっている可能性を念頭において、大学新生83名を対象に調査研究を行った。その結果、入学後あまり顔をあわせることのなくなった入学前からの友人とのメールのやり取りは、かえって孤独感を増長させる要因になりうることが示された。入学前からの友人とのメールのやり取りは、直接会うことができない故にやむなく連絡手段として使っていることとも関係が深く、それによってかえって孤独感が増すというのが五十嵐・吉田(2002)の解釈である。しかし、入学後にできた友人との間においては、メールをやり取りすることによって孤独感が低減されることもあわせて示されており、普段顔を合わせて親密につきあえるかどうかによって、携帯メールのはたす機能が異なっている可能性が示唆されている。

以上のことから結論づけられるのは、人間関係を構築するためのツールが今の社会と以前の社会とでは大きく異なり、多様化し、さらに人々のコミュニケーションへの認識も変わりつつあるという現実の存在であろう。環境が変われば、それに適応している人間の質も変わる。従来のコミュニ

ケーションツール、コミュニケーションスキルのみしか理解していない人間にとっては、まさに若者は宇宙人のように見えてしまうのかもしれない。

1. 2 筆者の経験から

そもそも何故にこの論文を筆者が書くに至ったかといえば、ここまでに紹介した多くの研究を目の当たりにして問題の広さ、深さについて考えさせられたこともきっかけのひとつであるが、筆者自身の経験に基づく諸事情によるところも大きい。ここのところの学生たち全般にみられる経験的傾向を、筆者なりに以下にまとめてみた。

*意思決定力低下

長い時間を費やさねば意思決定ができない。個人的な決定はもちろんのこと、集団の中で何かひとつのことを決めなければならない場合は特に、有効なアイデアが出ないまま時間ばかりが過ぎてゆく。多くの意見や情報をまとめるということ、まとめてどのような結論を出せばよいのかということについて判断するのが非常に不得手である。またその決定をふまえて、次に何をしなければならないのかについて考える際にも、能率よくタスクをこなしてゆくことができない。これまで意思決定を求められたことがなかったのか、それとも人任せにしていたのか、あるいは、限られた時間内でそれなりの成果を上げることが求められたことがなかったのか、原因は定かではない。

*妙な自尊心の高さとガッツのなさ

決して自尊心が低いわけではない。むしろ、かなり高いのではないかと思われる。ただし柔軟性がないため、自尊心を傷つけられたことで「今に見ている」とますます自らを鼓舞するというよりは、「私の何が悪い」と意固地になって他者の意見や指摘を受け入れない傾向がみられる。また、壁にぶつかり、少し考えれば打開策が見つかるかもしれないの

に、「もう駄目だ」と簡単に諦めてしまうパターンもよくみられる。その一方で、風に撓る柳の如く手ごたえのない学生がいることも確かである。なるようにしかならないと諦めているのか、誰かが何とかしてくれると思っているのか、それすらわからない、極めて意志力が希薄な学生が目につく。

***他者に自分を受け入れてもらいたいと思う反面、ありのままの自分を見せて嫌われたくないとも思っている**

「手段として他者と交流すること」が得手ではなく、孤独を好む傾向(他者とのかかわりをもちたがらない傾向)が強い。他者に自分のことをわかってもらうためには、社会関係の中に自ら飛び込んでいかなければならない。ところが、他者との交流をもつための年齢相応なコミュニケーションスキルを身につけていないために失敗経験ばかりを積み重ね、わかってもらえない、変なことをして嫌われるのではないかとの不安が先に立つようになる。こうして外に出て行くことを拒めば当然、他者に対する自己表出の機会も減るがためにスキルは磨かれず、他者に十分に理解される術をもたなくなる。わかってもらいたいと思っているのにわかってもらえない、どうしようもない、だったらこのままでいい、と閉じこもってしまう。この悪循環と矛盾が、一種の対人関係膠着状態を生み出しているように見える。

***実は自己責任性に乏しい**

刹那主義である。つまり、今を楽しむことを第一に考え、将来のことはそのときになってみなければわからず、どうにかなるだろうと思っている。そう思うのは他ならぬ自分であり、自分がいいと思っているのだからいいじゃないか、という主義主張は、一見非常に自己責任に基づいた判断であるように思える。しかしこのことは裏を返せば、他者に迷惑をかけていないのだから何をしようが自分の勝手だ、というソフトな利己主義の蔓延を意味する。「では、他者に迷惑をかけなければ何をして

もいいのか、本当に自分の行動は他者に何も影響を与えていないのか」という根本的問題をいかに認識させていくかが非常に重要である。このような視野は、多くの社会的経験を積んでいくことで自然に身につくものであり、人に教わるものではないと筆者は思っていた。例えば、人間関係の中で嫌な思いをしたならば、同じことを自分はすべきではないし、よい経験をしたならば次回に活かすことを考えるのが基本的な社会的学習の姿勢であろう。この姿勢をもつことで、自分の行動を社会的な文脈から見直し、単なる利己主義を脱し、客観的な視野を身につけるための第一歩を踏み出すことができるのである。このような視野が、どういうわけか年齢相応に身につけていないと思える学生が増えているようである。もちろん、自分は他者ではない。よって、完全な客観的視野を持つことは不可能であるし、どうしても主観という名のフィルターがかかる。だが、社会生活を営む人間として存在する以上、他者を全く無視するわけにはいかない。他者を認識しながら自己を構築し、その自己を表出することで他者に影響を与えていくマイクロマクロな視点を認識しているかどうか、今後ますます問われることになるかと筆者は考える。

筆者が学生だった頃にもこのような学友が存在したことは確かであるが、より程度の深い学生が年々多くなってきているように思えてならない。この直感の示すところが何であるのか、教育を提供する側の人間として無視して通り過ぎることができず、手探り状態ながらも研究を志すに至った。

2. 質問紙構成項目

本研究では、コミュニケーションツール・手段の多様化が背後にあるという前提のもとに、現状把握を行うことを第一目的に次の2種の尺度・項目を取り入れた予備調査を行うものとする。また今後の時系列的なデータ

蓄積に向けての準備を兼ねて、学年間比較も併せて行う。

① 在学生の自己感・他者感についての項目群

在学中の学生が現時点でもっている自己感・他者感を、既存の心理尺度を用いて測定し、現状把握に努める。今回は特に、平石(1990)の自己肯定意識尺度と沼崎・小口(1990)のセルフ・ハンディキャッピング尺度を選んだ。

② 在学生の対人関係の作り方に関する項目群

筆者が経験的に得たことがらに基づいたオリジナル項目29項目について測定を行い、①との関係について分析する。

2. 1 平石(1990)の自己肯定意識尺度

平石(1990)は、青年期における自己意識の発達、とりわけ自己を肯定する傾向について検討するため、自己肯定性の個人差を対自己領域と対他者領域のふたつに分けて測定しようと試みた。

*** 対自己領域(19項目)**

① 自己受容(4項目)

- 1) 自分なりの個性を大切にしている。
- 2) 私には私なりの人生があってもいいと思う。
- 3) 自分の良いところも悪いところもあるままに認めることができる。
- 4) 自分の個性を素直に受け入れている。

② 自己表現的態度(7項目)

- 5) 自分の夢をかなえようと意欲に燃えている。
- 6) 情熱をもって何かに取り組んでいる。
- 7) 前向きの姿勢で物事に取り組んでいる。
- 8) 自分の良い面を一生懸命伸ばそうとしている。
- 9) 張り合いがあり、やる気が出ている。
- 10) ●本当に自分のやりたいことが何なのかわからない。
- 11) ●自分には目標というものがない。

③ 充実感(8項目)

- 12) 生活がすごく楽しいと感じる。
- 13) わだかまりがなく、スカッとしている。
- 14) 充実感を感じる。
- 15) 精神的に楽な気分である。
- 16) 自分の好きなことがやれていると思える。
- 17) 自分のはのびのびと生きていると感じる。
- 18) ●満足感がもてない。
- 19) ●ここから楽しいと思える日がない。

※ ●は逆転項目を示す。

*** 対他者領域(22項目)**

①自己閉鎖性・人間不信(8項目)

- 20) 他人との間に壁をつくっている。
- 21) 人間関係をわずらわしいと感じる。
- 22) 自分は他人に対してところを閉ざしているような気がする。
- 23) 自分はひとりぼっちだと感じる。
- 24) 私は人を信用していない。
- 25) 友達と一緒にいてもどこかさびしく悲しい。
- 26) 友人と話していても全然通じないので絶望している。
- 27) 他人に対して好意的になれない。

②自己表明・対人的積極性(7項目)

- 28) 相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる。
- 29) 自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている。
- 30) 疑問だと感じたらそれらを堂々とと言える。
- 31) 友達と真剣に話し合う。
- 32) 人前でもこだわりなく自由に感じたままを言うことができる。
- 33) 人前でもありのままの自分を出せる。
- 34) 自主的に友人に話しかけていく。

③被評価意識・対人緊張(7項目)

- 35) 人から何か言われたいか、変な目で見られないかと気にしている。
- 36) 人に対して、自分のイメージを悪くしないかと恐れている。
- 37) 自分が他人の目にどう映るかを意識すると身動きできなくなる。
- 38) 他人に自分の良いイメージだけを印象づけようとしている。
- 39) 無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている。
- 40) 自分は他人より劣っているか優れているかを気にしている。
- 41) 人に気を遣いすぎて疲れる。

ふたつの領域のうちの一つである対自己領域を測定するための項目は全部で19項目あり、3つの下位成分に分類可能である。対他者領域を測定するための項目は全部で22項目あり、こちらも3つの下位成分に分類可能である。

端的に言えば、対自己領域の項目は「自分自身をどのように理解し、どの程度好ましい・望ましいと思っているか」を測定するものであり、対他者領域の項目は「他者と自己との関係において、どの程度自己を表出し、かつ、つきあう上でのストレスを感じているか」を測定するものであるといえる。なお、予備調査においては、すべての項目はオリジナルの研究で採用されていたものと同様に5段階尺度(1=あてはまらない～3=どちらともいえない～5=あてはまる)を採用した形で導入されている。

2. 2 沼崎・小口(1990)のセルフ・ハンディキャッピング尺度

あることがらについて失敗が予測され、さらにその失敗によって自己評価や社会的評価が低下する恐れがある場合、あえてそのことがらの遂行を妨げるような行動をわざととることをセルフ・ハンディキャッピングと呼ぶ。今回用いた尺度は、全23項目から成る。

- 1) 失敗すると、すぐ状況のせいにしたくなる。
- 2) ぎりぎりまで物事を先のばす方である。
- 3) ●試験を受けるとき、十分すぎるほど準備をしてしまう。
- 4) 人より体調が悪いことが多い。
- 5) ●どんなことでも、いつでもベストをつくす。
- 6) ●重要な活動などには、そのために必要な準備や経験が自分にあることを確かめてから参加する。
- 7) 試験の前にはとても不安になる。
- 8) 本を読もうとすると、騒音や空想で集中できなくなりやすい。
- 9) 人に負けたりうまくいかなかったりしても、あまり傷つかないですむように、人とは張り合わないことにしている。
- 10) 自分のもっと努力すれば、もっとうまくできるのと思う。
- 11) いつ手に入るかどうかかわからない未来の大きな楽しみより、現在の小さな楽しみの方を選ぶ。
- 12) ●何事にもベストで望めないのはいやだ。
- 13) いつの日か完璧になれたらと思う。
- 14) 1日か2日の軽い病気なら、ときには病気であることを楽しんでしまう。
- 15) 感情に邪魔されなければ、もっとうまくできるのと思う。
- 16) 何かうまくできないとき、他のことはうまくできると自分を元気づけることがよくある。
- 17) 他人の期待にこたえられないとき、理由づけをしようとする。
- 18) スポーツやテストをするとき、運が悪い方だと思う。
- 19) ●重要なことがある前には、明瞭に考えたり、適切なことをする能力を妨げるようなものは飲まない。
- 20) 食べすぎたり飲みすぎたりすることがよくある。
- 21) ●生活のある場面での悩みや不安を、他の場面には持ち込まない。
- 22) 非常に落ち込んでしまい、簡単なことさえなかなかできなくなってしまうことがときどきある。
- 23) ●気分転換が早くできる方である。

※ ●は逆転項目を示す。

※ 「重要なことがある前には、明瞭に考えたり、適切なことをする能力を妨げるようなものは飲まない」については、少々文言に解りにくさがあると判断したため、実際に用いた質問項目においては「重要なことがある前には、明瞭に考えたり、適切なことをする能力を妨げるようなものを飲んだり食べたりしない。」と改変している。

これは、失敗の原因を上手く処理し、自分で自分を追い詰めないように

するために有効な手段である。例えば、単位を落としそうな科目の試験が目前に控えているとき、あえて勉強ができない環境をつくっておく(アルバイトを連日入れる、飲み会に行く、体調を崩してしまうほどの無茶をする)ことがこれに当たる。もしも単位を落としても、それは「状況の所為(アルバイトが忙しい時期だったから、飲み会が重なる時期だったから、体調を崩していたから)」であって自分の力が足りなかったわけではない故、自己評価も社会的評価もさほど下がらずに済む。仮に単位がとれた場合は「こんなひどい状況だったにもかかわらず単位がとれた」ことになるため、ますます自己評価も社会的評判も上がるだろう。単位がとれてもとれなくても自尊心は傷つかないし、他者から「彼/彼女は能力がない」と罵倒されることもない。実に合理的なやり方である。

このような方法は自分を追い詰めないためには有効だが、用いすぎれば当然問題が起こる。「また彼/彼女は言い訳のためにセルフ・ハンディキャッピングをしている」と他者にセルフ・ハンディキャッピング戦略が詳らかになってしまった場合は、かえって逆効果である。また、何でも都合の悪いことは状況の所為にしてしまうために、自らの行動そのものに対して責任をもたなくなる可能性や、自らをもっと伸ばしてゆこうとする意欲を失う可能性もある。

なお、オリジナルの研究で用いられていた項目には6段階尺度(1=まったくあてはまらない、2=あてはまらない、3=ややあてはまらない、4=ややあてはまる、5=あてはまる、6=非常によくあてはまる)が採用されているが、今回の質問紙においては平石(1990)の自己肯定意識尺度と同様の5段階尺度に置き換えて用いている。

2. 3 コミュニケーション・対人関係・自己像に関するオリジナル項目

上記の項目以外に、筆者が経験的に気になっている事項について訊ねる項目も併せて用意した。これは、5段階尺度にて測定する項目11項目に加

えて、モバイルコミュニケーション(主にメール)や日常問題について訊ねる項目18項目から成る。あくまでも経験に基づくものであり、現段階では何か理論的な背景に基づいた仮説が存在しているわけではない。ただし、これらのオリジナル項目29項目のうち後半の日常問題に関する質問項目については、今後改善を行って尺度としての精度を高める必要性が判明したため今回報告を省略する。

*** 5段階尺度にて測定された11項目**

- 1) 他者に、自分の真価を認めてもらいたいと思う。
- 2) 誰も自分のことなんか理解してくれないと思う。
- 3) 学校祭や体育祭などの全学的行事に参加するのはおっくうだ。
- 4) 今の社会環境は、自分が生きていくには厳しすぎると思う。
- 5) ひとりでいることが好きだ。
- 6) 友達との付き合いを大切にする方だと思う。
- 7) 大学で勉強をすることに意味を見出せない。
- 8) 将来、何らかの職業(定職)に就きたいと思っている。
- 9) 定年まで同じ会社で働きたいと思っている。
- 10) フリーターになるのも悪くはないと思う。
- 11) 結婚や出産を区切りに、仕事を辞めようと思っている。

回答の際の順序効果を防ぐため、筆者が考案した日常生活に関するオリジナル項目18項目以外の全項目(5段階尺度を採用した項目全75項目)をランダムにシャッフルし、2バージョンの質問紙を作成した。

2. 4 実体についての予備調査実施

2002年11月27日及び12月11日・12日の3日間を用いて調査を行った。調査対象となったのは、北海道武蔵女子短期大学1・2年生のうち、筆者が担当する『社会心理(教養学科1年・経済学科2年対象)』と『人間の心理(教養学科2年対象)』を受講していた学生333名(1年生201名、2年生132名)である。なお実際に分析に用いられたのは、欠損値が著しく多かった5名を除いた328名(1年生199名、2年生129名)分のデータであった。

調査は講義の時間を用いて行われ、出席カウントをかねて行われたため記名式であった。ただし、回答に対するインセンティブとして平常点が加算されるが、学術的目的以外には一切使用されないこと、個人個人のデー

タが個別に公開されることも一切ありえないこと、それでも回答をしたくない場合には回答を拒否する権利があることについて説明がなされた。なお、回答を拒否した場合でも成績評価にあたって不当な扱いを受けることはないこともあわせて強調された。作成された2バージョンの質問紙は、前もって適宜混合した上で学生に配布された。質問紙への回答時間はおよそ20分ほどであった。

3. 予備調査の結果

既存の尺度スコアについて考察したのち、オリジナル項目11項目と既存の尺度スコアとの関連性について考察を行う。

3. 1 それぞれの項目に関する覚書

まず、平石(1990)による自己肯定意識尺度及び、沼崎・小口(1990)のセルフ・ハンディキャッピング尺度に関して逆転項目を処理し、各スコアを個人ごとに算出した。次に、1・2年を総合したスコアの集計、それぞれの学年ごとのスコアの集計及び1・2年のスコア平均値の差の検定を行った。結果は以下に示す通りである(表1)。

表1. 既存の尺度のスコア平均、検定結果

項目内容	全体平均 (標準偏差) 人数	1年平均 (標準偏差) 人数	2年平均 (標準偏差) 人数	1・2年の平均値の差に関するt検定結果
自己受容スコア	3.79 (0.71) 328	3.67 (0.72) 199	3.97 (0.65) 129	t(326)=4.00 p<.01
自己表現的態度スコア	3.06 (0.84) 325	2.95 (0.83) 197	3.24 (0.83) 128	t(323)=3.12 p<.01
充実感スコア	3.20 (0.78) 328	3.05 (0.78) 99	3.43 (0.72) 129	t(326)=4.46 p<.01
自己閉鎖性・ 人間不信スコア	2.44 (0.84) 324	2.54 (0.89) 197	2.30 (0.75) 127	t(322)=2.58 p<.01
自己表明・ 対人積極性スコア	3.17 (0.78) 322	3.05 (0.76) 194	3.34 (0.77) 128	t(329)=3.27 p<.01
被評価意識・ 対人緊張スコア	3.14 (0.85) 326	3.26 (0.81) 198	2.95 (0.86) 128	t(324)=3.22 p<.01
セルフ・ハンディ キャッピングスコア	3.15 (0.40) 319	3.17 (0.40) 191	3.11 (0.39) 128	t(317)=1.31 n s.

※標準偏差は、そのデータのばらつき度合いを示す数値である。大きければ大きいほど、データが広くばらついていることを示し、小さければ小さいほどデータが平均値近辺に固まって分布していることを示す。

※ $P < .01$ とは、平均値の差の検定の結果導かれた結論が誤っている確率が1%未満であることを示す。

調査の目的に従い、1年生の各スコア平均値と2年生の各スコア平均値の差の検定(t検定)を行ったところ、セルフ・ハンディキャッピング尺度以外のスコアについては、すべて1%水準で統計的に有意な差が見られた。全体的なパターンとして、2年生は1年生に比してより自己を肯定的にとらえ、積極的に外側へ外側へと自己を表現しようとしているのに対し、1年生は2年生に比して自己に対して否定的な印象を持ち、殻に閉じこもる傾向が強いといえよう。もちろん、平均値の差の数値そのものは決して大きくはなく、また、5段階尺度の中央付近(どちらともいえない)に分布が固まっていることから、今回の差の方向性について強い結論を出すことには疑問が残る。また、データセット規模が大きい故に統計的に有意な差が出やすくなっていることも否めない。とはいえ、筆者自身がもっていた経験的事象が一部データ上でも示されており、1・2年の質には統計的に無視できない差異がある可能性を肯定するに十分な客観的証拠であるといえる。セルフ・ハンディキャッピング傾向には学年差は見られなかった。今回は細かなところまでは分析していないが、個別の項目ごとに見れば何らかの差異があるのかもしれない。

続いて、筆者が作成したオリジナル項目についての考察を行う。これらのオリジナル項目は下位スコアが確立している尺度ではないため、ひとつひとつの項目について1・2年の平均値の差を検討する(表2)。

5%水準及び1%水準で統計的に有意な差が見られた項目は、「②誰も自分のことなんか理解してくれないと思う。」、「④今の社会環境は、自分が生きていくには厳しすぎると思う。」、「⑩フリーターになるのも悪くはないと思う。」、「⑪結婚や出産を区切りに、仕事を辞めようと思っている。」

表2. 筆者オリジナル項目についてのスコア平均、検定結果

項目内容	全体平均値 (標準偏差) 人数	1年平均値 (標準偏差) 人数	2年平均値 (標準偏差) 人数	1・2年の平均値の差に関するt検定結果
①他者に、自分の真価を認めてもらいたいと思う。	3.84 (1.04) 327	3.81 (1.02) 199	3.88 (1.07) 128	t (325) = .51 n s.
②誰も自分のことなんか理解してくれないと思う。	2.13 (1.11) 328	2.28 (1.15) 199	1.91 (1.00) 129	t (326) = 3.11 P < .01
③学校祭や体育祭などの全学的行事に参加するのはおっくうだ。	2.66 (1.40) 327	2.77 (1.42) 198	2.50 (1.35) 129	t (325) = 1.68 P < .1
④今の社会環境は、自分が生きていくには厳しすぎると思う。	2.85 (1.09) 328	2.94 (1.06) 199	2.70 (1.12) 129	t (326) = 1.98 P < .05
⑤ひとりでいることが好きだ。	3.43 (1.15) 328	3.51 (1.12) 199	3.30 (1.20) 129	t (326) = 1.59 n s.
⑥友達との付き合いを大切にする方だと思う。	4.02 (0.99) 328	3.98 (1.00) 199	4.08 (0.97) 129	t (326) = .88 n s.
⑦大学で勉強をすることに意味を見出せない。	2.39 (1.17) 327	2.46 (1.20) 198	2.28 (1.12) 129	t (325) = 1.38 n s.
⑧将来、何らかの職業(定職)に就きたいと思っている。	4.48 (0.83) 328	4.46 (0.85) 199	4.50 (0.81) 129	t (326) = .36 n s.
⑨定年まで同じ会社で働きたいと思っている。	2.71 (1.25) 326	2.75 (1.21) 197	2.64 (1.32) 129	t (324) = .80 n s.
⑩フリーターになるのも悪くはないと思う。	2.77 (1.45) 328	2.64 (1.46) 199	2.97 (1.40) 129	t (326) = 2.01 P < .05
⑪結婚や出産を区切りに、仕事を辞めようと思っている。	2.69 (1.42) 326	2.91 (1.41) 197	2.36 (1.37) 129	t (324) = 3.50 P < .01

の4つであった。平均値の差の向きから考察すると、1年生は2年生よりも自分は他者には理解してもらえないものと考え、今の社会環境を厳しいものにとらえているが、できるだけ社会保障のきく定職に尽きたいという希望を強くもっており、ある程度勤め上げたのちには結婚あるいは出産を機に職場を辞し、家庭の中で果たすことのできる役割を重視した生活に切り替えたいと思っているといえる。また、10%水準で統計的に傾向差が見られた項目は「③学校祭や体育祭などの全学的行事に参加するのはおっくうだ。」であった。平均値の差の向きから考察すると、1年生は2年生に

比べてやや学校行事に参加することを厭うている可能性があるといえる。近年、特に親しくない人を含めた集団の一員として活動をしなければならない事態を嫌がる学生が増えているのではないかと経験的に感じていたが、これはその経験的事象を弱いながらも指示する証拠であるといえよう。

これらの結果においてとりわけ興味深いのは、1年生が2年生に比べて「絵に描いたような将来像」を強く抱いている点である。定職につき、しかるべき年数を勤め、その後結婚・出産を期に退職するパターンは、ひと昔前、女性にとって理想的な20代ライフスタイルと言われてきたもののひとつである。ところが2年生になると、フリーター志向が若干増し、結婚や出産を期に退職しようとする傾向も低くなっている。実際に就職活動を行い、自らの将来について自分自身の問題として具体的に考え、壁にぶつかった経験をふまえての認識なのかもしれない。社会保障のある職業に就くことの難しさ、夫の収入だけで暮らしていくことの難しさ、せっかく勝ち取った職を簡単に失いたくないとの思いについて、より現実味を帯びた認識をしているのだろう。

もちろん、平均値の差そのものは決して大きなものではなく、データセット規模が大きい故に統計的に有意な差が出やすくなっていることが否めないのは、先に行った自己肯定意識尺度及セルフ・ハンディキャッピング尺度に関する分析と同様である。

3. 2 変数間の関係(相関分析)

では次に、先に紹介した自己肯定意識尺度スコア、及びセルフ・ハンディキャッピング尺度スコアと、筆者によるオリジナル11項目との間の関係性について考察することを目的に、ラフな相関分析を行う。ただし今回のデータセットは調査対象者が300人以上の大規模データであるため、±0.2程度の相関でも統計的に有意であるという結果が出やすくなっている。よってここではひとつのめやすとして、全体・1年生・2年生それぞれについて

±0.4以上の相関のあった変数をピックアップし、考察を行う(表3)。

表3. 各スコアと項目間の相関係数

相 関 分 析 対 象 と な っ た 2 変 数		全体の相関 (人数)	1年生相関 (人数)	2年生相関 (人数)
自己表現的態度スコア×	⑦大学で勉強をすることに意味を見出せない	-0.37 (325)	-0.42 (197)	-0.27 (128)
充実感スコア×	②誰も自分のことなんか理解してくれないと思う。	-0.43 (328)	-0.42 (199)	-0.38 (129)
自己閉鎖性・ 人間不信スコア×	②誰も自分のことなんか理解してくれないと思う。	0.66 (324)	0.64 (197)	0.68 (127)
	③学校祭や体育祭などの全学的行事に参加するのはおっくうだ。	0.44 (324)	0.48 (197)	0.35 (127)
	⑤ひとりであることが好きだ。	0.49 (324)	0.47 (197)	0.51 (127)
	⑥友達との付き合いを大切に にする方だと思う。	-0.51 (324)	-0.59 (197)	-0.36 (127)
被評価意識・ 対人緊張スコア×	①他者に、自分の真価を認めてもらいたいと思う。	0.35 (326)	0.31 (198)	0.42 (128)
	②誰も自分のことなんか理解してくれないと思う。	0.41 (326)	0.46 (198)	0.28 (128)

※自己受容スコア、自己表明・対人積極性スコア、セルフ・ハンディキャッピングスコアについては、オリジナル項目との間に±0.4以上の相関があった項目は皆無だった。

プラスの相関係数は、ふたつの変数の間に正の関係があり、片方の変数が大きければもう一方も大きく、片方の変数が小さければもう一方も小さいことを意味する。マイナスの相関係数は、ふたつの変数の間に負の関係があり、片方の変数が大きければもう一方は小さい、あるいはその逆を意味している。ただし相関係数はあくまでも、ふたつの変数間にどのくらい強い関係があるかを示すものであって、因果の方向性を示すものではない。この前提をおいて検討すると、ここに上げた相関関係には、経験的に考えても確かに納得できるものが多くみられる。考察結果をまとめると、次の4点に集約可能であろう。

- ① 意欲的にもものごとに取り組んでいれば、大学で勉強することを否定的にとらえなくなる(大学で勉強することに意義を見出している人は、須らく意欲的に活動している人でもあるといえる)。
- ② 精神的にストレスなく日々を過ごしていれば、皆に自分のことがわかってもらえないと嘆くこともない(皆自分のことをわかってくれないと思うことと、精神的にストレスを感じるこの間には、関連性が存在している)。
- ③ 孤独を覚えていると、他者とのかかわり、社会的な活動について否定的になる(他者とのかかわり・社会的活動を盛んに持つ人は孤独ではない)。
- ④ 他者の目を気にしすぎていることは、他者に自分の真価を認めてほしいことの裏返しである。またそのような傾向をもつ人は、他者は自分の真価を認めてはくれていないと思っている(自分の真価をとりたてて認めさせようとしていない人は、そんなことを今更せずとも他者には十分に自分の力を示しており、そういうことができる人は他者を恐れず自己表出のできる人物であるといえる)。

要約してしまえば、いわゆるプラス志向ならば積極的・社交的になり、マイナス志向ならば消極的・非社交的になるのである。

先に述べたように、相関分析はあくまでもふたつの変数間の関係の強さについて考察するための分析であり、因果を問うことはできない。因果を想定して考えるよりもここで重要なのは、鶏が先か卵が先かの議論においてはふたつの変数はそのいずれもが互いを規定しあっており、どちらか一方だけを考察対象にしても問題解決に結びつけることはできないということである。

4. 考察と展望

以上のラフな分析の結果から考察しうること、そして残された課題について最後に議論する。

4. 1 1・2年の差異について

今回の調査の結果から、1・2年の間には統計的に無視できない差異が存在しており、全般的にみると、1年生は2年生に比して消極的である可能性が示されている。

では、この差異の生起に関連していると思われる要因にはいかなるものがあるだろうか。今回の1・2年生の比較だけで結論を出せるわけではないが、以下に、現時点で考えうる要因をふたつ挙げる。

4. 1. 1 学力低下

おそらく、誰もが最初に思い至る理由がこれであろう。ただし筆者は、学力低下という便利語一言で今回の結果を簡単に片付けてしまうことに対して強い危惧感を抱いている。年々基礎学力が低下してきていることは、多々報道されている通り決して無視できない事実ではある。しかし、基礎学力がなくなることが、学生の内面までも変える最大の説明要因なのだろうか。まだ誰も、この問題については明確な解答を持っていない。明確な回答を示すには、現時点においてはあまりに材料が足りない。数年に渡ってデータを蓄積して比較するのはもちろんのこと、今盛んに唱えられている教育改革に基づき、ゆとり教育を受けて育ってきた子供たちが大学に進学して数年が経過してからでなければ、判断は不可能であろう。学力低下が阻止されたのか、子供たちの生きる力は養われたのか、人とのかわりをうまく行えるようになったのか、ペーパーテストで測定できる能力値はもちろん、ペーパーテストで測定できる側面以外についても客観的・時系列的データを蓄積してゆくことが大切である。

4. 1. 2 人生経験

もうひとつ思いつくのは、「人生経験の差」である。今回のデータの場合、人生経験の差とはいってもただか1年の差である。しかし、短大2年目というものは、4年制大学の2年目とは大きく異なっている。短大2年目を迎えた学生は、学生生活が始まって丸1年しか経っていないにもかかわらず進路を確定しなければならない事態に直面し、自分の実力ではどうにもならない経験を多々積み、恐らくこれまでの人生の中で最も過酷な状況におかれることになる。その経験を通じて、同じものを見ていても1年前とは違う解釈、違う望みが生まれてくることは十分に考えられる。

学習面においても、学生が学年を経ることによって変化がもたらされることを藤沢(2002)が報告している。藤沢(2002)によれば、学年を経るにしたがって学生たちが授業に対して期待する内容も異なってゆくのだという。彼の報告では、どの学年においても、重視される上位3つの着眼点(思考発展(いろいろと考えさせられることは多かったか)、興味深い(授業内容に興味をもてたか)、理解容易(説明は理解しやすかったか))は同じであったが、順位が4位以下の着眼点については、学年ごとに順位の入替わりが見られることが示されている。とりわけ学生参加(教員は学生の意見や感想をきく努力を積極的にしていたか)と授業方針(詳しい授業方針の説明があったか)は、学年が上がるごとに重視される率が高くなっている。逆に、学習環境(教室内の雰囲気はよかったか)は学年を経るごとに重視されなくなっている。ここで注目すべきは、学生参加への重視度が学年を経ると高まるという報告である。学生参加の重視度が高くなるということは、ただ受身で学習するのではなく、学生が自ら考え、その考えの積極的表出を望んでいることの現われとも考えられる。入学当時は引っ込み思案だったかもしれないが、学生生活を営む中で多くを学習し、多くの経験を積み、積極的に自己表出できるようになったが故の結果であるとの解釈が可能である。

4. 2 浮かび上がる『若者像』

時系列的なデータ蓄積が大切であることは繰り返し述べた通りである。だが現に我々が直面している問題は、時系列的データ蓄積を待っているだけでは何も解決しない。今どうすべきか、今回得られたデータから何を考察することができるだろうか。

今回のデータからは、1年生は2年生に比べて非社会的・非積極的であり、自己閉鎖性を強く持っている可能性が示唆された。この傾向は単純に善悪判断ができるものではない。他者との相互関係は重要だが、だからといってべったり一緒にいればよいというわけではないからである。ここで考えなければならないのは、その傾向は長きに渡って培われ、変えることの困難な普遍的傾向なのか、それとも比較的短期間で可変する傾向なのかということである。言うまでもなく、コミュニケーションを行うことは、我々が円滑な社会関係をつくり、それを維持していくため、あるいは、望ましくない関係を断ち切るために必要とされるものである。社会的生物である以上、我々は誰ともかかわらずに一生生きていくことはできない。もちろん筆者は、他者との円滑な関係の構築が、コミュニケーションによって完璧に可能になるなどと考えているわけではない。むしろやっかいなのは、自分の性格や特性についてわかってもらえないと思って最初からコミュニケーションを諦めていることが、あらゆる自己表出場面に影響を与え、自分の思考について説明をしない、しないからできるようにならない、いざというときすることができないという副次的な問題を生み出す可能性である。

では、このような副次的問題にはどのような特効薬がありうるだろうか。山口(2002)は、他者とコミュニケーションをとる場合、他者によい印象を抱かせるには言語的コミュニケーションはもちろん、非言語的コミュニケーションの役割も重要であるとの基本的な考え方にたち、とりわけ就職面接場面における非言語的コミュニケーションスキルは、トレーニングを積むことによって上達する可能性を示している。さらにこの研究では、非言語

的スキルを上達させることで副次的に言語的スキルをも上昇させうる可能性も示されている。つまり、トレーニング如何ではそれ相応にスキルが身につく、実際に自分への社会的評価も上がるのだということを少しずつ学習し、自信をつけていくことができるのである。

仕事や友人関係に疲れ、人と関わりたくないと思うことは誰にでもある。それでも人と関わらずには社会生活を営めない。この矛盾を乗り越える活力はまず、必要最低限のコミュニケーションスキルを身につけ、失敗を繰り返しながら辛抱強く実地で訓練を積み、スキルをアップさせていくことによって支えられるのであろう。

4. 3 これからの動向

学生の質がマイナスの方向に変化していると言われてこの現状が何によって引き起こされたのかに関する議論の行方は、未だ混沌としている。多々論争はあるが決着は全く見えない(市川, 2002; 戸瀬・西村, 2001)。また、単に平均値だけで議論をしては現実と乖離した結論を導く危惧もある。例えば、基礎学力が低下している証拠として出されているデータには統計上の落とし穴が隠されている可能性がある。仮に統一ペーパーテストを行ってその平均値が5年前に比して下がっていたとして、この結果が全員のレベルの低下を意味していると考えるのは早急すぎる。ひょっとすると、上位と下位の差が大きく開き、若干下位が増えただけなのに平均値が下方へ引っ張られているように見え、上位は相変わらず上位として君臨しているだけかもしれないのである(永山, 2002)。

平均値の低下よりも考慮すべきは、学力についてはもちろん、その他の事項についても上位と下位の差が余計に開く事態が起こっている可能性の方である。上位の子供を退屈させたり腐らせたりすることなく、かつ下位の子供にわかりやすいよう教示し、能力・スキルを引き上げなければならない事態に、我々はどう対応してゆかねばならないのだろうか。そもそも、

同時にこれらふたつの事態を解決できるのかどうかすら、教育を提供する我々にも確固たるアイディアがあるわけではない。

さらに、そもそものゆとり教育のコンセプトであった、社会に適応し、臨機応変に対応できる「生きる底力」は、ゆとり教育によって育て上げるのだろうか。義務教育・高校教育のあとを継いで教育を提供する我々は、5年10年のスパンで教育・社会を考えてゆくためにも現状を時系列的に静観し、メリットとデメリットを慎重に分析した上で検討を重ねてゆかなければならない。そうしたデータを組み合わせ、メタ分析し、さらに経験則との齟齬について考察してゆく試みは、学術的分野においてますます増えてゆくだろう。

そのような事態の中で、我々自身が山積みの問題を解決することに意欲をもち、ぶつかっていくこともまた必要である。あるいは、このバイタリティこそが最も我々にとって重要なファクターであるのかもしれない。本研究が、そういった果敢な挑戦に対して僅かでもヒントを与えるものとなりうるならば、これ以上に喜ばしいことはない。

引用文献

- 藤沢伸介 2002 大学生の授業評価における観点の推移 日本心理学会第66回大会発表論文集, 1093.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の構造—自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康— 教育心理学研究, 38, 320-329.
- 市川伸一 2002 学力低下論争 筑摩書房.
- 五十嵐祐・吉田俊和 2002 大学新生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 184-185.
- 永山彦三郎 2002 現場から見た教育改革 筑摩書房.

- 沼崎誠・小口孝司 1990 大学生のセルフ・ハンディキャッピングの2次元 社会心理学研究, 5, 42-49.
- 岡田朋之・松田美佐 2002 ケータイ学入門 メディア・コミュニケーションから読み解く現代社会 有斐閣.
- 島田博司 2001 大学授業の生態誌 「要領よく」生きようとする学生 玉川大学出版部.
- 島田博司 2002 メール私語の登場 —大学授業の生態誌3— 玉川大学出版部.
- 田中道弘 2002 青年の向上心と時間的展望との関連について(2) 日本心理学会第66回大会発表論文集, 43.
- 都築誉史・木村泰之 2002 メディアコミュニケーションの心理的特性に関する分析(2) 日本心理学会第66回大会発表論文集, 172.
- 戸瀬信之・西村和雄 2001 大学生の学力を診断する 岩波書店.
- 山口一美 2002 面接場面の自己呈示としての非言語的行動の表出訓練 —スマイル、アイコンタクトに焦点を当てて— 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 272-273.